

学校経営 重点目標	具体的 方策	担当 部署	評価指標・評価基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)		関係者 評価
				達成状況	評価	達成状況	評価	
	集団の一員 としての自 覚を持ち、 各学校行事 に積極的に 参加させ る。 (全学年)	生徒課	学校行事に積極的に参加し、仲間と協力できたか。 A：「よく出来ている」、 「だいたい出来ている」が全校の90%以上 B：上記が85%以上90%未満 C：Bに満たない (評価は全行事の平均で行う)	各種委員会や実行委員会・発表会、球技大会 などの行事や部活動を活用して、生徒個々に 活躍の場を提供することで主体的に活動し、 自己有用感を感じる生徒が年々増えていると 思われる。特に各クラス担任や関係顧問の先 生方には生徒が仲間と協力しながら学校行事 に積極的に参加できているかという視点で指 導にあたって頂いたところ、本年度も高い数 値となった。	A	本年度も各種委員会や実行委員会・発 表会、球技大会などの行事や部活動を 活用して、生徒個々に活躍の場を提供 することで主体的に活動し、自己有用 感を感じた生徒が多くいたと思われ る。ただ、2学期の球技大会について は昨年に引き続き数値が低く、来年度 以降の更なる充実を目指して工夫が必 要であると思われる。	A	
			対象 1年…球技大会・オリキャン・白鷺祭 行事 2年…球技大会・長距離ウォーク・白鷺祭 3年…球技大会・白鷺祭 4年…球技大会・白鷺祭 5年…球技大会・長距離ウォーク・白鷺祭 6年…球技大会・白鷺祭	1学期球技大会…97.6% オリエンテーションキャンプ…97.5% 長距離ウォーク…96.3% 全体…97.1% (1学期末)		A 1・2学期の全行事の達成度は95.0% となり、前年度同様高い数値であつ た。 白鷺祭…94.6% 2学期球技大会…91.1% 全体…95.0% (1, 2学期通算)		
	自発的な家 庭学習の大 切さを理解 させ、「授 業第一」を 実現するた めの準備と 復習および 主体的な学 習を实践さ せる。	進路 指導課	1・2年 平日2時間,休日4時間 平均150分 3・4年 平日2時間,休日4時間 平均150分 5・6年 平日3時間,休日5時間 平均200分 の学習時間の達成率 A：達成率 60%以上, B：達成率 50%以上60%未満, C：Bに満たない ※ただし、上記の数字に表れない要素も評価指標の内容に 加え、評価していく。	2学期にテスト等がない日の学習時間の調査 を実施する予定であり、その結果を含めて評 価をしていくつもりなので現段階では評価を 出すのは難しい。しかし、生徒の様子から見 る我々の肌感覚では自発的・主体的な勉強を している生徒が各学年の左記の目標時間の 50%以上いるとは考えにくい。	未	学校評価アンケートにおける生徒の勉 強時間に関する評価は、1年=A、2 年=B、3年=C、4年=B、5年= B、6年=Aである。また、後期課程 のみに実施した進路アンケートの結果 によると、考査のない平日の勉強時間 は、4年生で平日2時間以上が約4 割、5年生で平日3時間以上が約1 割、6年生で平日3時間以上が約8割 で、6年生のみが目標を達成できてい る。また、自分が主体的に勉強できて いると答えた生徒は、4年生・5年生 で6割弱、6年生では9割以上であつ た。以上のことを総合的に評価する と、やや中だるみが見られる学年があ るものの6年生などはよく頑張っており 、総合的に見てBとしたい。	B	

学校経営 重点目標	具体的 方策	担当 部署	評価指標・評価基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)		関係者 評価
				達成状況	評価	達成状況	評価	
互いを尊 重し高め 合う集団 づくりを 通して、 進路意識 の高揚と 学力の向 上を図る	美化委員が 中心となっ て早朝ボラ ンティア清 掃を行う。 一般生徒を 募ることに より清掃を 通じてより 良い集団作 りに貢献す る。	厚生課	各学年ごとに月に一回早朝ボランティア清掃を行う。毎回の参加者数をカウントし、学年で20名以上の参加を目指す。 全学年の全回数の平均参加者数が20名を100%として、以下のように評価する。 A：90%以上 B：70%以上 C：Bに満たない	今年度より数値目標を定め、取り組んでいるボランティア清掃は、毎月順調に実施されている。参加人数は以下のとおりである。 1学期 前期課程 各学年平均参加者数 22名 A 後期課程 各学年平均参加者数 17名 B	B	大安仁の日を含めて、各月に1回ずつ学年単位で早朝ボランティア清掃を実施した。1学年に平均20名の参加を目標にしていたが、 前期28名 年間・・・後期18名 という結果で 全体25名 あった。目標は達成することができたので、来年度も引き続き取り組みを続けていきたい。	A	B
	授業における図書室利用を増やすよう努める。	メディアセンター	前期・後期課程ともに、クラス平均8回以上の利用を目指す。 A：前期、後期ともに達成 B：どちらか片方の期のみ達成 C：前期、後期ともに未達成 昨年度 (前期課程) 9.7回 (後期課程) 9.6回	1学期終了時点で授業利用は、前後期合わせて98回であったが、その内訳は前期90回(クラス平均7.5回)、後期8回(クラス平均0.67回)と大きく偏っている。2学期以降は特に後期の使用を促したい。	B	1月24日時点で、授業利用は前期課程で215回(クラス平均18回)、後期課程で40回(クラス平均3.3回)となっている。2月にも4教科10時間の予定が入っている。後期課程は受験との兼ね合いで難しいが、進路学習に結びつけた活用を促していきたい。 上記以外に教室に図書の本を貸し出して授業に活用したケースがある。	A	
	生徒が知識と体験を融合できる機会を企画する	グローバル教育推進室	各学年のグローバル行事において、事前指導で生徒にねらいを伝える。それをふまえて生徒が各行事の自己目標をたてる。行事終了後、生徒が、自己目標に対する達成度を自己評価(点数で評価)し、それを集計する。 A：生徒達成度平均80点以上 B：生徒達成度平均60点以上 C：Bに満たない 昨年度(4年生のみ) 全体…81点	4年「はばたけ！大安寺生」 「教えて先輩」 達成度81.2% 3年「海外事情研究」 達成度78.2%	B	4年「はばたけ！大安寺生」 「教えて先輩」 達成度81.2% 3年「海外事情研究」 達成度78.2% ※中間期と同じ内容	B	

学校経営 重点目標	具体的 方策	担当 部署	評価指標・評価基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)		関係者 評価
				達成状況	評価	達成状況	評価	
	アセスメントを効果的に活かした生徒の学校適応感の向上	教育 相談室	<p>(前期) 教育相談事前アンケートやhyperQU検査・いじめ悩みに関するアンケート調査の結果分析を活かした生徒面談や支援ができる。</p> <p>(後期) ASSESSやいじめ悩みに関するアンケート調査の結果を活かした生徒面談や支援ができる。 A：アンケートとQU検査の分析の両方を活用して面談・支援ができる B：いずれかの結果を活用してできる C：活用できない</p>	<p>前後期とも、一学期に心理検査を実施し、結果を生と理解や支援に役立てている。細やかな支援が引き続き行われており、生徒は落ち着いており、問題行動や不登校はきわめて少ない状態が保たれている。</p>	B	<p>前期・後期とも、一学期に心理検査を実施し、結果を学年会議等で共有して細やかな支援に役立てることができた。また、二学期には、心理検査とともにいじめ悩みに関するアンケートを実施して、多角的な視点から生徒の現状を把握して、指導・支援の資料とすることができた。</p>	A	
	あたたかな学校風土づくりを目指した心の教育・ユニバーサルな環境づくりの推進		<p>(前期) 「品格教育」や「PBIS」「SEL」「ピア・サポート」等の活動を教科や学年団と協力して推進する。</p> <p>(前期・後期とも) 「相談室便り」を活用した心を育む情報提供を行う。 また特別支援・人権に配慮した環境作りに努める。</p> <p>A：各学期ごと（品格教育は毎月）に活動し、活動に広がりや深まりができ、あたたかな学校風土・安心安全な環境が保たれる。 B：各学期ごとにおおむね活動できる。 C：Bに満たない</p>	<p>「品格教育」は日々の生活の中で心がけられ、実践されている。また各学年ごとに生徒の心を育む取り組みを意識し、実態に合わせた実践（「PBIS」「ピア・サポート」等）を工夫している。 「相談室便り」は計画通り発行し、情報提供できている。</p>	B	<p>「品格教育」は日々の生活の中で心がけられ、実践されている。また各学年ごとに生徒の心を育む取り組みを意識し、実態に合わせた実践（「PBIS」「ピア・サポート」等）を工夫している。 「相談室便り」は計画通り発行し、情報提供できている。 特に、前期課程では「品格教育」の目標を基にした生活指導の工夫が各担任・各学年で多様に工夫され、本校の人間教育の基盤となってきた。</p>	A	
	生徒の主体的で協働的な学びを支援できるよう、教員の授業力向上を図る。	教務課	<p>生徒の主体的で協働的な学びにつながる授業を工夫、実践するとともに、教科または学年等で研究協議の場を設けた教員の割合。 A：80%以上 B：60%以上 C：Bに満たない</p> <p>(昨年度) 授業形態や評価方法の新たな工夫を行った教員の割合→目標(90%)を達成</p>	<p>主体的で協働的な学びにつながる授業の工夫は今年の共通テーマであり、授業を実践することはできた。しかし、他の教員の授業を参観した割合は全体の56%、研究協議の場を持つことができた割合は全体の47%に留まった。まず「参観する」ことの徹底を図り、実践を更に高質なものにするための協議を意識してもらおうよう改善策を考え、提案したい。</p>	C	<p>中間期の反省を踏まえ、公開授業時間のより見やすい掲示、職員朝礼での声かけ等により授業互見への意識を高めた結果、他の教員の授業を参観した割合は全体の96%、研究協議の場を持つことができた割合は全体の82%まで高まり、教材開発や指導技術の向上につなげることができた。 今後は教科、学年、前後期など、より大きな単位で授業改善に向けた協議に取り組めるような仕掛けづくりを進め、全教員がカリキュラムマネジメントを意識する足掛かりとしたい。</p>	A	